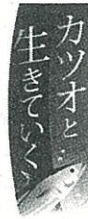


カツオ資源保護「諦めぬ」

県民会議セミナー 水産庁次長報告

高知市



水産庁事務方トップの神谷崇次長が24、25日に来高し、「高知カツオ県民会議」が主催するオンラインセミナーに参加した。熱帯海域での乱獲や、資源を守るための国際交渉の厳しさについて報告し、「カツオは日本全体にとって大事な魚。資源状態は厳しいが、諦めずに頑張っていく」と述べた。

神谷次長は同会議の要請に応じ、受田浩之

会長代理（高知大副学長）との対談形式で出演。中西部太平洋のカツオ漁獲量が、米国のどの巻き網参入で1980年ごろから急増した経緯などを紹介し、「日本近海の20〜30万トだけだった漁獲量が現在は全体で200万ト近くまで増えた。資源に影響がないわけがない」と指摘した。

なぜカツオの国際的な資源管理が進まないのかなど、オンラインで寄せられた質問にも回答。「国際交渉は表でできないことを言い、裏で相手の弱みところを突いて権益を得るどろどろした世界」と明かし、カツオ資源の減少を裏付ける科学的調査と、相手国に

じた交渉努力を続ける方針を強調した。カツオ県民会議については「行政と漁業者という水産政策の構図に『市民』を加えた。水産庁の方針と合致する」と評価した。セミナーは例年のシンプジウムの代替企画として11月にスタートして11月目。今後も高知市朝倉本町2丁目の高知大学次世代地域創造センターを拠点に継続し、年明け以降にネット上で一般公開する予定。

神谷次長は須崎市の養殖いけすなどを視察し、カツオ・マグロ漁業関係者とも意見交換した。

（八田大輔）

ウエブセミナーに参加した水産庁の神谷崇次長（左）と、カツオ県民会議の受田浩之会長代理（24日、高知大学次世代地域創造センター）